

# 千刈狸の呟き

## ～肌の色～

### テニス狸

テニスの錦織選手の活躍が日本を沸かせているが、非白人ゆえの差別をはねのけての快挙なのだ、という記事をネットで見た。ルーツが西欧貴族の伝統スポーツだからといって、いまだきまだ人種差別なのか、と嫌な思いに駆られた。炎天下のテニスでは、日焼けして赤くなっても白い肌に戻る白人と、浅黒く残るアジア人との差が目立つし、スタンドからコートを見下ろせば体型の差もわかりやすい。テレビで見る錦織選手の笑顔はこのようなことを超越しているように見えるが、実際はどうなのだろうか。

日本人が日本で生活していれば、肌の色や外観は主に個々の美容上の問題で、差別し、されるといった感覚は持たないように思う。かつてのグループサウンズの代表曲、「思い出の渚」では“小麦色したかわいい頬・・・”と歌われており、日に焼けた肌は健康的で好感をもたれる。もっとも、色白は七難隠す、ということわざもあるが。

海外の多種多様な人たちと身近に触れる機会が増えた昨今だが、もし白人（ここではコーカソイドで肌色の薄い西欧起源の人とする）の輪の中に自分ひとりだけいるとすれば肌の色が気になる、気後れる、という日本人もいると思う。それは文明開化以降、西欧を模範としてきたことで白人崇拜的なものが根底にあるからかもしれない。日本でいわゆる「ハーフ」として人気がある人たちは、ビジュアル的にも見栄えする白人との混血が多い気がする。

高校時代に米国にホームステイする機会を得た。ホストファーザーがクリスマスカード用に子供たち4人（いずれも金髪碧眼）と、日本から来た私が玄関に飾られたリースの前で顔を寄せ合っている写真を撮った。その写真を後で見たら自分の顔色だけくすんでいて、顔の造りも違っている。日常生活にすっかり同化していたつむりの私はその差異に面食らった。

それ以来、肌の色は太陽の下でも緑の草木の中に入れば白く映え、蛍光灯下では黄色調が目立ち、白熱電球下では赤みが強調されて白人と変わらないように見える、というような些細姑息なことに気づいた。もう半世紀近く前の話だが、このような経験は私自身のアイデンティティーを目覚めさせ、そして世界を動かしているのは白人なのだ、ということ意識させた。

新聞の新書紹介欄で「肌の色の憂鬱」という本（眞嶋亜有（2014）、中央公論社）のタイトルに興味をひかれ読んだ。近代日本が西洋化を目指していた頃、欧米を訪れた日本人が西欧列強から受けた人種的偏見にいかにかんが、憤慨し耐えたかという重苦しい学術書であった。政治家、外交官はも

とより、文人も例外ではなかった。夏目漱石がイギリス留学で白人とは異なる自分の身体的特徴に苦悩し、“ロンドンでの2年間ほど「尤も不愉快」で「あはれ」な日々はなく云々”と述べ、栄光とされた渡英の陰にみじめさと疎外感があったことが記されている。遠藤周作はフランス留学で経験した露骨な人種差別から、著書で“愛や理屈や主義だけでは肌と肌の色の違いは消すことができなかった”“俺は永遠に黄色くあの女は永遠に白”などと実体験を踏まえ述べている。

今や多くの日本人が欧米に留学あるいは仕事で駐在するようになった。最初は言葉の壁で苦勞し、やがて外見の違いという運命の壁に突き当たる人も多いはずだ。そこで、能力さえあれば人種なんて関係ないと居直ることができる人もいれば、劣等感にさいなまれ内向化する人、あるいは逆に白人社会に迎合する人など反応は様々だと思われる。しかし、こうした人種と差別に関する話はやはりタブーなのだろうか。大学医局時代、諸兄の留学帰国講演で研究報告は聞いても、このような実生活上での体験談を耳にすることはなかった。二次会など酒の席で話題になってもよいはずだが、私自身もこの微妙なことには触れたことがない。

人種差別がいけないことは子供でも知っているが、なくなることはないだろう。錦織選手の記事で嫌な気持ちにさせられたが、その一方で、世の中は変わっていないのかという諦念にも似た感慨を抱いた。つい最近も、サッカー場での黒人蔑視を示すバナナ投げ込み、米国における白人警官の容赦ない黒人射殺など枚挙にいとまがない。白人は大航海時代を経て地球上の至る所を植民地化したことで、非白人に対して優位に立ったといわれている。能力が優れていると建前上は言えないので、そのぶん優越感や傲慢さを無意識のうちに醸成してきたのだろうか。フランスの風刺新聞社が、ムハンマドを揶揄し、福島原発事故後に奇形の日本人を堂々と描く、などはその表れかもしれない。

だが、かつての途上国が経済発展し、非白人の国際社会への台頭が顕著になっている。盛者必衰の理のごとく、白人優位の時代がいつまでも続くとは限らない。その終わりの始まりが、たとえば中国が今の勢いで中華思想を前面に出しさらに増長したときかもしれないが、かつての黄禍論の再現を招くようなことにはならないでほしい。

日本文学者のドナルド・キーン（白人）が、“人間にとって一番悪い発見は、他の星、たとえば火星に人物がいないこと。もし異星人がいたなら地球上の人間はイデオロギーや宗教を越えて団結できただろう（2015.3.13読売新聞）”と述べている。イデオロギーと宗教に人種も加えたい。